

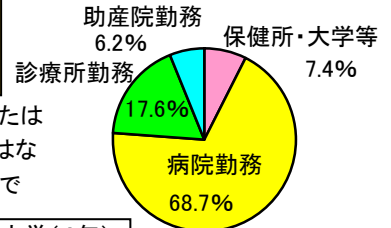
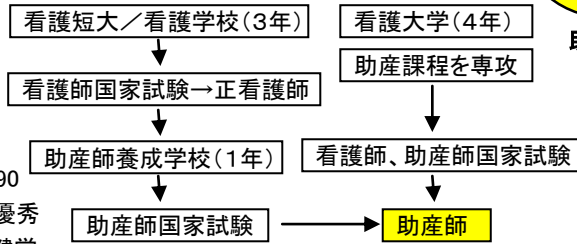


## 女子中高生必見 助産師のお仕事

保健師助産師看護師法第三条によれば、助産師とは「厚生労働大臣の免許を受けて、助産または妊婦、褥婦もしくは新生児の保健指導を行うことを業とする女子をいう」とあります。出産になくてはならない存在なのはもちろん、妊娠中の生活から、産後の母乳育児、赤ちゃんの世話、家族計画まで色々なことを教えてくれる、女性の強い味方です。

助産師になるには、従来3年制の看護短大を卒業して正看護師になり、さらに1年間助産師養成学校で学んで助産師の国家試験を受けるのが一般的でした。

最近は4年制の看護大学が主体となり、その中で助産課程を履修することになります。しかし助産課程は80~90名の看護大学の定員中、5~15名の狭き門で、成績が優秀でないと進めません。幸い県内には新潟大学医学部保健学科、新潟県立看護大学、新潟青陵大学、新潟医療福祉大学と助産課程をもつ看護大学が4つもあり、他県に比べて多くなっています。



**助産師の勤務施設**  
 全国には約 26,000人の助産師がいます。その7割は、知識・技術がよく学べる等の理由で病院内に勤務しています。

## 当院の助産師活躍の名場面集

## 助産師として働く喜び 大塚 和美



マタニティ・クラスで分娩の経過を説明



腰を擦って痛みを緩和「もうすぐですよ」



助産のハイライト「元気な女の子ですよ」 沐浴され「あー気持ちいい」



母子と共にが助産師の真髄



助産師として勤務してから二年目になりますが、その中でとても印象に残っているお産後の方がいます(以下Aさん)。Aさんは小学校教員で初産婦さんでした。おっぱいが豊満で乳頭は扁平、赤ちゃんがおっぱいを吸うのは難しい状態でした。入院中練習しましたが退院まで赤ちゃんがおっぱいを吸うことはできませんでした。おっぱいを吸ってもらえないのでスタッフやAさん自身でおっぱいを搾り、足りない分はミルクを足していました。

そんなAさんが産後3カ月頃病院を訪れ、赤ちゃんがおっぱいを吸うようになったと笑顔で話しおっぱいを見せてくれました。そのおっぱいにはしっかりと突出した乳頭がありました。私は経験が少ないので乳頭が出てきたことにとっても驚かされました。Aさんは退院後も授乳の練習と3時間毎の搾乳を続けていたそうです。

どうしてそんなにがんばることができたのかAさんに聞くと、くじけそうな時に母親から「一人目で苦勞しておくと二人目は必ず楽に育てられるから今ががんばり時」と言われたそうです。その話を聞き、普段は傍観者的で本人が必要とした時にサポートできる周囲の存在がとても大きいと感じました。そして、何よりあきらめずに頑張り続けたAさんの姿勢に、わが子におっぱいを飲ませてあげたいという母親の愛情を感じました。関わらせていただいた私もとても嬉しい気持ちになりました。(当院助産師)



退院指導 時にはガールズトークも



学会発表もするんですよ



おっぱい指導「深く含ませてね」



沐浴指導 見守るようにやさしく



計測「レディの体重を言ってごめん」



助産師の抱っこは美しい